慶應義塾 醫學部新聞

發行所 慶大醫學部新聞部 新宿區信濃町35
發行人 草間良雄
編輯人 小林文慶
月刊毎月十日發行

創立記念特輯

回顧三十年

北里柴三郎先生

祝辞

塾長 潮田江次

大正八年に慶應義塾の醫學部が出來てから本年で滿三十年を經過した。三十年といふ年月は塾の九十年の歷史に比べて日が淺い樣に考へられるかも知れないが、醫學部の前身とも云ふべき慶應義塾醫學所が設立されたのは明治六年であつて、西洋醫學を教授する私立の醫學校としては日本で最初のものである。

もともと福澤先生が師事された緒方洪庵先生は醫學の大家であり、同門は皆醫學生であつて先生が緒方塾で學ばれた書物も多くは醫學關係の蘭書であつた。そして先生は西洋文明を輸入して國民の思想を導かうとするには、其障碍となる漢學主義と共に漢方醫術を打破しなければならないと考へられたのである。かく福澤先生の醫學は其學問の出發點であり、塾に於ける醫學教育の歷史は古いものである。

慶應義塾醫學部は創立以來教育の面でも研究、醫療の上でも社會に、學界に多大の貢獻をなし遂げて來たのであるが、昭和二十年五月に戰災で施設の多くを失ひ、一時はその將來をさへ危ぶまれた。それが三四會はじめ各位の非常な奮鬪の熱意によつて立派に復興し、昨年十一月には病院も新築落成した。そしてこゝに創立三十周年記念のよき日を迎へ、新しい姿と共に新しい意欲を以て先輩の輝かしい多くの業績と傳統ある歷史に繼へようとする。心からお祝ひ申したい。

三十周年を迎えて

醫學部長 阿部勝馬

本年は吾が醫學部の學部が創つてから丁度三十年に、附屬病院が開かれてからは二十九年に、又豫科が設けられてからは三十二年に相成るのであります。

茲に醫學部創設當時を回顧いたしますならば、實に感慨無量なるものがあります。

吾々の北里先生が、當時の塾長鎌田先生の懇請を心よく容れられて、醫學部創立のことに當られますや、天下の學者は翕然として先生の下に集まり、ために吾が醫學部は實に堂々たる陣容を以て發足することが出來たのであります。

創立時代に於ける吾が醫學部の教授陣容を一瞥いたしますならば、北里、北島兩先生を初め、多數の世界的學者が居並んで、眞にファカルティの名に恥ぢない陣容であつたことが解ります。

それがために、吾が醫學部は創立早々より實に赫々たる發展をいたしてまゐりました。

顧え大正十二年の關東大震災には、幸いにもその厄を免れることが出來ましたので、教育にも、研究にも、診療にも何等の支障を來すことなく只管に發展の一路を辿ることが出來たのであります。

而して大正十二年三月第一回の卒業生諸君を世に送つて以來、卒業生を世に送ること誠に二十八回、年々歳々送り出されたこれ等の卒業生諸君は、國內に於ては勿論、海外に於ても、各地で發展せられて、世の信頼を受ける事になられましたので、吾が醫學部の名聲は、何時とはなしに國の內外に轟き亘り、私學の雄として自他共に許し、世の羨望の的となつたことは周知の通りであります。

實際吾が醫學部は、創立以來實に異數の發展を遂げ得たる私學の雄であると謂つても、決して過言ではないのであります。而してそれもこれも皆福澤先生の力の然らしめたものであり、又北里先生の力の然らしめたものであるのであります。

然るに昭和二十年五月吾が醫學部が、戰禍によつて多大の損害を蒙り、その施設の大半を燒失し、教育にも、研究にも、診療にも總べて事缺く狀態に陷りましたことは、余く遺憾の極みであります。

昔日の吾が醫學部の隆盛を顧る時、"又いつの日か還り返らうらめ"と長大息を吐くことさへもあるのでありますが、幸いにも塾當局の熱意と、醫學部同窓會北に父兄會北他の諸會に依る援助とによつて豫期以上に速かに復興しつゝあることは不幸中の幸いであると謂はねばなりません。

私は今醫學部復興の最中に三十周年を迎えまして、歸たる今昔の感に堪えないものがありますが、どうか諸君、吾々は徒らに過去のみを追わず、吾々の渾身の努力によつて、昔日の醫學部、否それ以上のものを新たに創造しようではありませんか。そしてこの三十周年の年をそのエポツクの年と致したいものであります。

―醫學部の歩むべき道―

わが慶應義塾大學醫學部も愈々今年は三十周年を迎へて本月は數々の記念の祝典が繰りひろげられる事になつた。醫學部創立當時の詳しい事情は時に本紙の舞に據つた北島先生の玉稿につまびらかであるがこうした創立者の夢や理想が過去三十年の間に如何なる實を結んだか。今靜かに反省すると共に塾醫學部が今後如何にあるべきかの理想とその理想に向つて現狀を如何にすべきかの改革について考へて見度い。

★大學として塾醫學部の性格

塾醫學部について述べる場合先づ慶應義塾大學自體の性格について述べる事が必要である。抑々大學の性格についての問題は同時に大學が養成する人間の理想そのことに關係する。それは又創立者の理想と創立者を生んだそれぞれの時代によつて大きく規定し影響せられるものである。慶應義塾は官學の如く近代國家の一機關として發達した學校ではない。幕末動亂の時に長い封建國家より脫し近代國家として生れ變らんとする日本の胎動期に新しき日本の建設と文化の創造の爲に一代の先覺者福澤先生によつて始められた學校である。明治三十年八月六日、日原昌造氏宛の先生の書簡に次の樣な言葉がある。"慶應義塾も命がなくなり候……命がなくなれば止めにしても不苦候得共世の中を見れば隨分學ぶべきもの少からず。近くは國人が漫りに外國に依賴して始末に困る事あるべし。遠くはコンムニズムとレパブリツクの漫論を生ずる事なり。此は恐るべき事にして唯今より何とか人心の方向を轉ずる工夫なかるべからず。政府などにはとてもこんな事を配慮するものあるべからず。夫を思へば本塾を存して置き度くツイ余が欲しく相成候云々…"此の事は近代國家の一機關として發達した官學が夏々國家の權力目的に奉仕を強ひられたのと異り飽くまで眞理に奉仕する獨立理性の府としての塾の存在と維持を念願せられた先生の高貴な理想を如實に語るものである。だがかゝる先生の理想を慶應義塾大學が果して實現し得たか否かは後世史家の批判を待たねばなるまい。此の事は又塾醫學部についても言へる事である。塾醫學部の創設者達は北里先生を始め秦、志賀等近代醫學の搖籃期に世界の醫學史に不朽の偉業を打ち樹てた人達であつた。そこには燃ゆるが如き人類愛と眞理に對する熱情があつた。世に喧しい傳研移管問題は眞に眞理と自由と獨立を愛する學者と元來眞理に奉仕すべき管の大學を國家の侍女たらしめ國家の權力目的に奉仕する事により國家社會の名の爲にあくなき己の功利目的を滿足せしめんとした官學の學者との爭ひであつた。こうしたすぐれた人々を創立者に持つ醫學部は誠に恵れたものと言はねばならない。しかしながら醫學部過去三十年の歷史をふり返つて見て果して此らの人々の理想の眞に合ひ得る人間を養成し得たであらうか又創設者の理想が幾何具現せられたのであらうか。

★あまりにも職業教育に墮しはしなかつたか

すべて創立の雛型を終へ漸く世に認められて事業が隆盛に向ふにつれ創立當時の進取の氣象は薄れ自らは努せずして創業の人達の遺産の分配にありつかうとするのが人情の常である。"獨立自尊は福澤先生の持論である。しかし塾に於ても既に明治十二年塾の事務を暫く盛大になつた頃猪飼麻次郎氏に宛てた先生の書簡に此の事が嘆かれてある。"實は教育の人に何分にも活動力に乏しく生徒も唯スペキユラチーブのみにてフイジカルサイヤンスを知らず宮藤時なる始末日々引込思案にて就職は他に好位置あるも之に就くを嫌ふ風の次第斯くては際限もなき事と存じ云々"とある。塾醫學部に於ても此の事は創立者達のあまりにも大きな遺産に甘へて自らの實力に賴む事を怠りはしなかつたか"有能なる人達が自ら進んで學外に出で自力で新分野を開拓する勞を嫌ひはしなかつたか、又學外に於て活躍した有能なる人達を學內に受け入れるのを嫌ひはしなかつたか。

又慶應病院の名聲が大いに上るにつれ元來學問の爲の道場であり、大學の附屬物にすぎぬ附屬病院が大きく前面にクローズアツプされさながら慶應病院附屬醫學部の觀を呈しはしなかつたか。此の事は醫學と言ふ學問が多分に職業教育の趣を持つて居るのと更に私學として學校經營が病院の收入に多分に依存するのと相俟つて更に拍車がかけられたと思はれる。創立者の偉大な理想がチヤチな功利目的とすりかへられ本來教育機關である事が忘られ學生は病院に於ては厄介者のあつかいをされて居る樣な誤りを犯して來た事は否定出來ない。

こうした事は小さい事だけど大きく心理的に作用して、長い年月の間に醫學部のあり方にしみ込んでくるものである。現にすぐれた醫學部の先驅で此の點は慶應病院の卒業生が多くて困ると放言して居る人もある。大學が讓貴の技術と資格を獲得する爲の單なる徒弟養成所と化す事を創立者は夢にも考へては居なかつた筈である。福澤先生の西學は此な事を言つておられるのではなかつた。

しかしながら此はあながち本塾醫學部ばかりの事ではない。世に大學は所謂登龍の門であり、立身出世が學習の目的とせられ處世の技術と資格の獲得の手段である事はそこに學ぶ學生はもとより其の父兄或は指導者すらもそう考へて怪しまなかつたのが日本の最近迄の實情である。

★"學業大學"としての塾醫學部の提唱

大學は理論的訓練と學問的研究を以て盡るものでもない、大學教育の目的はまた嘗に"人間"の養成に置かれねばならぬ。單に知性の啓發のみでなく人間"性格"の形成即全人の教育は大學教育の任務である。何よりも眞理を愛し正義を求んずる獨立自尊の人間を社會各層に向つて送り出す事である。規て凡そ日本に名のある大學の中でわざわざ"塾醫"と名を冠して居る大學は慶應義塾大學以外にはない。然し現在塾が他の大學に比べて特に義塾と呼ぶべき何らかの形態的な又は本質的な性格を持つて居るであらうか。創期には確かに福澤先生の偉大なる人格が"塾"と言ふ形態のもとにひとり學問思想のみならずそれと生活とを統一し、"全人"の教育を完うしたと考へられる。その當に當時の塾出身者は何れも日本の指導的地位を占め、慶應義塾は日本になくてはならない學校であつた。その後慶應義塾に代つて官學が色々な原因はあるにせよ日本の指導的地位を占め塾らの中にまたすぐれたる人々を出した事の影には濃厚學校に於ける生活様

（五頁六段へ續く）

（寫眞は新館正面）

黒板

○醫學部に不正入學があつたとかなかつたとかで三田新聞が取りあげ醫學部の學生の間にも何とか調査委員會と云ふしかつめらしい會が出來て責任者から説明を求めたりした。

○診療があつたから補缺をとつた。試驗は公正に行れた。寄附と入學は別物である。塾の方針に賛同し寄附してくれる樣な能力の家庭の子息は出來る丈入れ度い。一々御尤も、だがそうゆふ條件を堂々と謳いて公募するのを忘れたのはぬかりました理事殿。

○寄附は別として此な噂を立てられるのはあまり名譽ではない。私學に寄附はつきものだが寄附の取り方は學問教育を傷けるものがあつてはならない。西南戰爭のあふりを喰つて塾の經營が困難になつた時福澤先生は時の濱野定四郎塾長に非常を說つて發理の鎖附き弁びの爲に義金に無理を犯してはならない。唯今節を屈して人に金を貰ふよりは塾の所有を賣却して金を人に配分する愉快に若かずと言つて居られる。今の塾の指導者に此の氣魄ありやなしや。

○先日の三田新聞の醫學部ルポタージユは不確實な材料の上に立ち徒らに醫學部の中傷關係に終り心ある醫學部關係者は讀んで嫌くそが悪くなる樣な記事だつた。曾つては權威あつた三田新聞だがあれぢや街の赤新聞と何ら變る處がない。